

エッセマツ



No. 42

1997.10.20

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目次

1. 巻頭言 学校行事の観察会を指導して 会長 大友 健 (1)
2. 溪流に遊ぶ (3)
3. 新会員紹介 (4)
4. キーワード (8)
5. 森林生態系と共に生きるために 大槻日出男 (10)
6. 恵庭の自然 観察会 雑感 田中 利男 (16)
7. ニセコの自然 観察会報告 (17)
8. 本の紹介 (19)
9. 植物用語の解説集 川端 功治 (20)
10. シンボルマーク募集 (25)
11. 観察会研修会情報 (26)
12. 編集後記 (29)

学校行事の観察会を指導して

会長 大友 健

9月の下旬、札幌円山公園一帯及び、円山原生林を含めた地域において、専門学校生30名（花と緑の学科）の学習指導を、組織を通じて3名の指導員と共に引き受けたのである。

秋晴れの日恵まれ、学生、引率教師も気分さわやかなうちに、開講のセレモニーが始まった。学校側からは、日程、観察課題を知らされていただけに、十分な余裕をもって、資料も用意して当日を迎えたのである。

学生には、教師より観察項目取りまとめ用紙が渡された。内容を見ると、円山の歴史、公園内の施設、原生林の植生分布、観察でき得た植物の科属と特徴、最後に円山の森林帯及び特徴、これらを現地観察、手持ち参考資料により取りまとめることとあった。

それを手にした私は、どのように指導し、その中でいかに思考させ、理解させどのように発展させていくかを、自身が今一度確認の意味も併せ、全員を芝生に円形に座らせ、学校側の観察項目全般に触れた「全体指導」を行い、後に「担当グループ指導」更には「個別指導」を各講師よりしていただくのが効果的と思い、引率教師の意に少しく反していたかとも思いながら、その通り実行させていただいた。

30名の学生は、知的レベルがそろっていることもあり、「全体指導」では自然の概要を、公園一帯の地、歴史そして円山生成の地形、地質、土壌、自然林の特色及び主な林床植物、森にすむ動物、森のしくみ、これらを指導効果を上げるべく、考え方、話し方、感情表現に配意しながらの40分であった。

「植物共同体」と「動物共同体」の植物連鎖関係を保ち、物質循環をいぢしつづけ、森林としての機能を高めている話で終わろうとするころ、理論的すぎたの感じがして来たが、学生の真剣な目付き、そしてメモをとる姿に自身が自信をもって終えたのである。

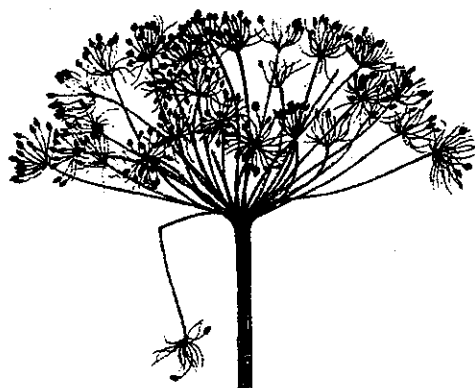
この体験を通じ、指導者と我々がボランティア活動をしている、解説者との違いはどこにあるのだろうか、改めて考えるこのごろである。

特に、学習指導は指導者、教材、学習者が有機的にかかわりあって、展開されて行くものだけに、学習者が主体となること、そして自ら教材を発見し、関連事項も含め理解し、次々と学習意欲を高めさせて行かねばならないと思うのである。

相手が求める指導者とは、まとめの段階まで学習者が、はつらつとした意欲をもち続ける指導を受けられると思うのは当然と思うので、学習者の心理的な側面をくみ取れる資質と、接し方をわきまえることが大切ではないだろうか。

自然解説を主体に活動している我々は、自然に関心が強い人、レクリエーション的に森に来る人と異種多様の方々を、相手に接していることから、それぞれの喜びがあり、それぞれの疑問があり、それらから自然に対する人間的感動を大なり小なりに得ていただくよう、意欲あふれる観察会を実行し、積み重ねた実績を大切に生かし続けているのである。

この文をつづっている最中に、事務局長より我が協議会に、本州の高校生が秋のネイチャーリング公開講座の一端として、野幌森林公園にて観察会を行う旨の指導要請があったとのことで、関係する会員はそれなりに体験を大切に、今後多様化する、自然観察会、自然野外教室に対応の機会も多くなることから、指導というテクニックも会員研修の場をもって学ぶべきではないでしょうか。



溪流に遊ぶ

今年の夏は友人に誘われた溪流釣りにのめりこみ、週末になるとソワソワと気持ちの落ち着かぬ夏の季節を終えました。

北海道の川は本州のあちこちの川と比べ、環境がよく自然に遡上できる川が多いとも言われています。しかし、最近は開発や河川整備という名目のもと釣場が失われつつあります。それは、川の自然が失われ、自然破壊が進んでいる証拠でもあります。

ところで、北海道の山間部や湿原の川、湖沼にはたくさんの魚が生息しています。ヤマベ、イワナ（エゾイワナ）、オショロコマ、アメマス、ニジマス、イトウ、ウグイ等がそれです。オショロコマ、イトウは北海道以外には生息していない特異な魚でもあります。

これらの魚を釣りまくるのは決して望ましい姿ではありませんし、釣人には節度あるマナーのもとに行動する責任があると思うのです。そんな心で今年の夏は、フライの竿を振り続け溪流釣りを楽しんだのでした。

6月以降の活動

- 6月29日(日) ・「ニセコの自然」観察会 ニセコ神仙沼周辺
(下見 6月28日 交流会 ニセコ町 ペンション「ふきのとう」)
- 7月 3日(木) ・森林公園事務所主催「7月の森の観察会」協力参加
- 7月13日(日) ・「恵庭の自然」観察会 恵庭公園駐車場 集合
- 8月 7日(木) ・森林公園事務所主催「8月の森の観察会」協力参加
- 8月10日(日) ・「真駒内の自然」観察会 真駒内保健保安林
- 9月 7日(日) ・「利根別の自然」観察会 岩見沢市利根別自然休養林
- 9月12日(金) ・役員会 於：かでの2・7
- 9月28日(日) ・野幌の自然観察の集い 野幌森林公園 「森の自然教室前」集合
- 10月20日(月) ・広報誌「エゾマツ」42号 発行

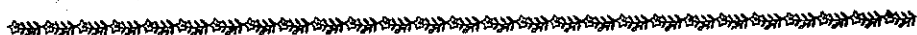
新会員紹介

7月18日から20日 積丹町総合文化センターで、平成9年度ボランティア・レンジャー育成研修会が行なわれました。

今年度も、ボランティア・レンジャー協議会から講師として、大友会長、川端副会長、五十嵐幹事が派遣されました。

育成研修会の修了者で、本会の趣旨に賛同され入会された方は下記の21名です。新しい仲間として、観察会や研修会での活躍を期待しています。

札幌市	小林 千穂	斎藤 聡子	西原 豊	鈴木 義治
	武田 安博	松本 直樹	田原さゆり	田安 隆
	宮川 博史	山本 悟志	渡邊 智子	矢島 慶子
北広島市	小西 奈美	福田 真紀		
千歳市	高松 俊雄	畠山 克則		
江別市	佐藤 学	小樽市	杉山 淳	
北見市	大道 具一	積丹町	佐藤多美子	
静内町	斎藤 滋一			



札幌市厚別区 宮川 博史

はじめまして。先輩のみなさまに自然についてご指導をお願いいたします。浅い知識しか持っておらず、一つ一つ学んでいきたいと思っております。

自然を大切に作る心、人間も自然の一部ということを忘れずに生きていきたいと思っております。

積丹町 佐藤 多美子

積丹は、今収穫の秋をむかえています。農家のお手伝いをしながら まわりの野山の変化に心をときめかせています。

自然豊かなこの地で、いつか子ども達に野山の草花について話しが出来ることを夢見ています。春から秋へ 季節の変化とともに移りかわる花々のことを もっともっと勉強してゆきたいと思います。

追伸

ボランティア・レンジャー育成研修会が積丹町で開かれたことに感謝しています。いつも歩いている野山を再発見出来ました。ありがとうございました。

江別市 佐藤 学

この度、友人に誘われてボランティア・レンジャー研修会に参加させて頂き 自分の住んでいるこんな身近に多くの自然があり、いろいろ問題を抱えていることに気がかされ、考えさせられました。

今後はレンジャーとして、より多くの人に 自然について考えてもらえるようお手伝いをしていきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

小樽市 杉山 淳

積丹半島を中心によく植物を見て歩いています。今回この積丹で育成研修が行われると聞き、参加してみました。

半島の道路が全面開通して以来、随分と騒がしくなりました。今後の自然破壊が心配です。この素晴らしい自然がこれ以上破壊されないよう、すこしでも力を尽くせたいのです。



札幌市東区 小林 千穂

おいしい魚や果物等、秋の實りに幸せをかみしめている今日この頃です。先日豊平川沿いの十五島公園の辺りを歩いてきました。まだ、自然がよく残っていて、春に歩いた時は、オシドリなどきれいな鳥が数羽見られて、札幌に来て9年になるのに、この自然をよく見たことがなかったので、感動してしまいました。

この都会にこのような自然があるというのはとても素敵なことだと思います。いつまでも残っていて欲しいです。

札幌市東区 田安 隆

協議会の会員の皆様、日頃、大変なご尽力には敬意を申し上げます。あの研修を得てからは余暇を利用しての山行でも、今までとは違い山道に咲く小さな花にもいとおしさを感じます。また、広葉樹林の中に針葉樹がまばらに繁っているのを見たりすると、この環境の時代の先には何があるのだろうかなど、ふと思い浮かべることがある様になりました。

これからは、多くの自然観察会に参加し、協議会の一員として活動したいと思う今日この頃です。どうぞよろしく願いいたします。

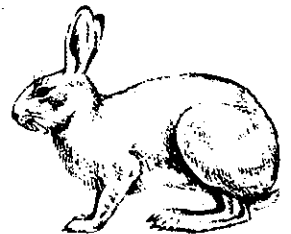
札幌市西区 矢島 慶子

はじめまして。私の毎朝の散歩道は、宮の森と三角山から盤溪方面です。あたりまえの所ですが、ここでエゾモモンガ・エゾライチョウ・ヤマシギ等を見られた方はラッキーです。ホオジロやマムシはいつも見られます。

このたびボラレンの先輩方に温かく迎えていただき、有難うございました。今後は森の成り立ちも学びます。

《同期の方々へ》

先輩はとても親しみ易い方々です。紅葉の季節、冬芽の頃、そして春のかわいいロゼットの頃、多数ご参加ください。



札幌市豊平区 田原 さゆり

憧れのボランティア・レンジャーの仲間入りをさせていただいて、たいへん嬉しいです。とはいっても名札も腕章も付けるのが恥ずかしく、気がひけて、自然観察会ではいつもドキドキしています。もっと一般市民の顔で観察会の経験を重ねてからレンジャーを目指すべきだったかなと、少し悔やんでいます。ともあれ、同期研修生はじめ諸先輩方々と仲間になれたことを支えにして、レンジャーとしてあまり恥ずかしくないように勉強したいと思います。よろしくお願いします。

北見市 大道 具一

ボラレン研修会を終え、まずは地域の活動に参加しなければ、と気ばかりが焦りすぎて何をどうしたら良いのかわからず、なかなか行動に移せないまま1ヶ月が過ぎようとしたある日、そうだ!! とりあえず家族に自然のすばらしさを…と思い妻に話しをしてみたが興味をしめしてもらえず…それならと、娘(4才)と息子(1才)にチャレンジしてみたら、なんと手応えあり!! (もちろん息子はただ指をしゃぶっているばかり) それ以、来毎日幼稚園までの道を娘と、このきれいだねとか、あの鳥は何を食べてるのかな、この実はどこから落ちてきたのかな、など毎日が自然観察会となりました。

札幌市東区 渡邊 智子

この度は入会させて戴き有難うございます。私、夏は石狩川河川敷でシマアオジ調査員をしております。激減のシマアオジですので来年度は全道シマアオジ調査予定です。是非!皆様の御協力、宜しく願いいたします。

鳥は冬、小樽の海に多数出現のウトウ、ウミガラス等の観察を続けていますので、そこそこ理解しているつもりですが、植物はさっぱりです。皆様には色々教えて戴き少しでも覚えられたらと思っております。どうぞシマアオジ情報共々宜しく御指導お願いいたします。

キーワード



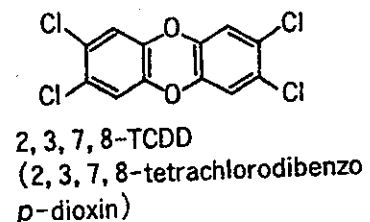
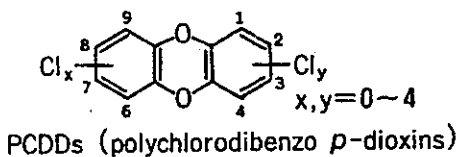
ダイオキシン

大気を構成する気体は、固体や液体と違ってその境界を示す界面がないため拡散や移動が容易です。ですから、大気は環境汚染物質を大気の動きとともに比較的短期間のうちに地球規模に広げてしまいます。現在、地球上ではいろいろな化学物質が大気中に排出されています。その中には直接人体に害をおよぼす有害なものもあります。大気中に排出された有害化学物質は拡散して希釈されてしまい、化学物質の濃度を正確に求めるのは容易ではありません。

いま問題になっている「ダイオキシン」は有害化学物質の中でも特に毒性が強く史上最悪の化学物質とも呼ばれています。このダイオキシンが人体に蓄積されるとガン発生の引き金になったり、肝臓・腎臓障害、脂質代謝の変化、細胞性免疫機能の低下、妊娠中に汚染されると奇形児を出産する率が高くなったりします。かつてベトナム戦争の際、上空から撒かれた枯葉剤のなかに不純物として含まれていたダイオキシンによって、シャム双生児のベト君・ドク君のような先天性の奇形児が発生したとも言われています。

ダイオキシンは、塩化ビニールなど有機塩素化合物が燃える際に偶発的に発生します。そして、私たちの生活から出るゴミの焼却が有力な発生源の一つであることも確認されています。それは、都市ゴミ・廃油・医療系廃棄物の焼却に伴うもので

ダイオキシンの化学構造



あり、特に都市ゴミからの発生量は、わが国では78～88%を占めています。発生量では、50万人分のゴミを処理する焼却炉では、一日あたり350～1600mgのダイオキシンが排出されているとう試算もあります。

ダイオキシン発生を防ぐゴミの焼却温度は800度以上で24時間運用の焼却炉でならぬといえます。

ですから、ドラム缶などでゴミを燃やすことはもちろん、家庭用の簡易焼却炉ではむりです。

ダイオキシンを含め、わが国の有害大気汚染物質に対する取り組みは大変遅れています。遅ればせながら、1995年9月環境庁長官は中央環境審議会に今後の有害大気汚染物質対策のあり方について諮問し、1996年1月その答申が出さ

れています。つい先頃、環境庁と厚生省は、ダイオキシンについての調査研究のあり方を論議する「ダイオキシン類総合調査検討会」を開いています。

私たちの毎日の生活から出されるゴミが、焼却炉で燃やされ、その結果が大気を汚染し人体を侵しているというまぎれもない事実を、私たち一人ひとりが真剣に受け止めなければならないと思うのです。

日本国内のダイオキシン類
発生源と発生量 (1990年)

発生源	年間発生量 (g)
都市ごみの焼却	3,100～7,400
廃油などの焼却	460
医療系廃棄物の焼却	80～240
下水汚泥の焼却	5
製紙スラッジの焼却	2
製紙での回収黒液燃焼	3
木材・廃材の焼却	0.2
金属精錬関連施設の排煙	250
たばこの煙	16
紙・板紙製品	40
自動車の排ガス	0.07
石油添加剤 (潤滑油)	20

(平岡正勝氏の試算から)

ボランティア・レンジャー実践セミナーの実施

平成9年度に実施されるボランティア・レンジャー実践セミナーは、道の情報によりますと、楡山・留萌・十勝の3支庁で実施されます。

具体的な実施計画は、目下担当支庁で検討中だそうで、その状況については該当支庁経済部林務課自然保護係にご確認ください。

森林生態系と共に生きるために～倫理的平等の概念の拡大を～

－野幌森林公園・休養園地整備計画への私見－

札幌市 大槻 日出男

はじめに

野幌森林公園の案内図を見ると、北西部のところに住宅地が楔状に食込んだところが大沢口（中央口）です。この大沢口の駐車場を含めた60㍍が、休養園地区整備計画の対象になっているところです。

休養園地区は、1968年北海道が大沢口付近の離農地を買い上げ、一部を生活環境保全林にし、一部を記念施設地区として現在まで30年間整備されずに来たところです。この期間に3㍍が学校用地として転用されましたが、残りは自然にまかせ ノラニンジンやセイタカアワダチソウなどの帰化植物が中心の草地に、タラノキやツルウメモドキなども生え、野鳥も多く観察されるところです。この土地に埋蔵文化財センターと公園整備事業として トイレ、駐車場、交流館、遊歩道を3年で完成させる整備計画が進行しているのです。

この計画に対して「森・草原・オオジシギを守る会」の五十嵐代表は、毎日新聞紙上で「園地を広く道民に開放するためなら、今ある遊歩道で十分」と現状維持の立場で計画に反対しています。一方では「野幌森林公園を守る会」の柳沢会長は、啓成高校新聞紙上で「この計画は我々が考えてきた方向と合致する所が多く、基本的に賛成できる」と述べています。さらに休養園地区に隣接する札幌啓成高校では、その新聞100号にこの問題を取り上げ「緊急レポート～生態系の保護か破壊か～自然どころか人と人との共生を…」と、成り行きを注目しています。

この計画には、自然保護の立場からでも意見がわかれ、私の友人や隣人の間でも自然保護のあり方、保護運動の進め方について論議されています。私自身にとりましても身近なところでおきた自然保護の問題です。この問題に検討をくわえ、自分の意見をまとめてみたいと思います。

1. 大都市に隣接する平地自然林に何がおきているか

野幌森林公園のある江別市・北広島市・札幌市の合計人口は、約200万人2000名の森林公園も都市化の波の中で緑の孤島です。この緑の孤島に各シーズン数万人の人々が訪れる。野の花や野鳥を楽しみ、森林浴をすることはすばらしいことですが、森林生態系への影響を無視はできません。

私は年間を通して、週に一回位年間50～60回森を訪れます。特に大沢口からの森はすばらしく、よく出入りします。また休養園地区には野鳥の調査等で、20数回歩いています。私が原稿を書いている窓からは、休養園地区に続くポロベツの沢が望まれ冬には庭の餌台に森林性の野鳥を中心に20種とエゾリスもやってきます。私の生活と環境は、人々の活動が森林生態系へあたえる影響・問題点が見える場にいます。森林生態系を守る観点から、私が気付き、経験した問題点をまとめてみます。

a) 森林公園の周辺では

森林生態系は孤立したものではなく、周辺の農耕地などと密接な関係があります。

2年前の大沢口のフクロウはドブネズミを餌にしていました。夜の住宅地が狩り場なのです。公園の池にはオシドリやカワセミ等が観察されますが、その池も周辺の農家の水田稲作に依存しています。農家との協力関係はどうしているのでしょうか。長期的展望を含め、関係機関の取り組みが必要でしょう。

周辺の都市化はやむを得ないにしても、団地や道路を作るにあたって森林に配慮した取り組みがなされているのでしょうか。残念ながら否定的です。今年、森林公園のトド山口の南側の農地に高等学校が開設されましたが、森に包まれた学校にはなりそうにもありません。森の周辺の住宅地や施設の照明は、森や空ににげる光をおさえているのでしょうか。私たちはほんのちょっとした配慮さえしていないのです。

b) 森林では

ほんとに多くの人々が森を楽しんでいます。特に高齢な方や婦人の割合が高くなり視覚障害の方も、個人やグループでサポートの方々と一緒に歩かれています。ときには車椅子の方を数人でサポートされて歩いています。このような光景にあいますと、私たちは森の楽しみ方がほんとうに豊かになったと思います。

しかし、私たちの意識や行動、組織やグループの協力関係、そして森の施設は多数

の人々が森林にはいり活動するほど、十分に制御されているとは思いません。

具体的に問題点を列記しますと

- ・トイレはひどい。健康な男性ならなんとかかなるが婦人はつらい。車椅子の方は対象になっていません。
- ・ケモノ道ならぬヒトノ道が林床を傷めています。山菜・キノコ採り、そして写真一人ひとり小さな傷でも、野草を踏みつけ、道をつけています。
- ・自然の中に入った人は、ゴミを持って帰るのがあたりまえなのに小さなゴミや吸い殻が森中にあるのは残念です。ゴミ袋や灰皿は個人が用意するものでしょう。
- ・野鳥観察会、自然観察会、歩こう会、マラソン大会、スキー大会、そして森の中の音楽会です。森の動物や植物のために、主催団体は日程、その方法について連絡しあい調整しているでしょうか。

*1996年 春 巣作りをはじめたクマガラは、写真撮影を嫌がり途中で巣作りをやめる。

*1997年 冬 遊歩道から離れた樹洞に住みついていたエゾフクロウは、木の根元まで再三おとずれるスキーヤーからのがれ、姿をけす。

*1998年 秋 遊歩道で観察され咲くのを楽しみにしていたアケボノソウは、すべて折られている。

ほんの一部の問題点、一部の現象ですが、各シーズン、数万の人々が訪れる森のことです。これらのことが繰り返しおきている。人々のささやかな行動・振舞いが森の中に問題を累積させ、森林生態系の容認限界をこえているのです。

c) 大沢口・休養園地区では

野幌森林公園で、もっともみごとな平地自然林が観察できる大沢口は、森に出入りする人数がもっとも多いところです。休日には駐車場が車であふれています。

休養園地区は住宅地に隣接し、一部には農家跡や農道も残っていますので、北西側は荒れ地の印象が強く、ゴミ、焚き火の跡、柵のあるところも柵をはずしてヒトの踏跡道が、ポロベツの沢まで数本続いています。野火の発生などを考えますと、現状維持が、自然保護として適切かどうか疑問が生じるところです。

2. 森林生態系の保護の課題は「善意の数万人」

1968年 道立自然公園として指定されたときから森林公園は、大都市に隣接した平地自然林の保護というテーマを担う自然公園でした。以来30年、都市化の波の中で、このテーマの重要性は増大しているのに、森の施設は老朽化し、森を訪れる人の増加は、自然を大切にす人々の意識をこえて、様々な問題を表面化させているのです。現在、野幌森林公園の自然保護の観点での重要な課題の一つは、多くの都市生活者が、憩いを求めて森に来る。自然が好きで森を大切に考えてくれている人々が森を訪れる。ただし、各シーズン数万人です。

「ちょっと、きれいな花を……。かわいい小鳥の巣作りを写真に……。キノコをすこし……。」と、一人ひとりやさやかに 数多くの人々が繰り返す。そこで起こる小さな問題の累積が森林生態系を追い詰めているのです。

都市で生活する者が自然を楽しむことは大切なことです。森林に多くの人々が訪れるのは、大都市に隣接する森林公園としては当然のことです。

問題の解決は、森林を訪れる多くの人々の中にあると思います。森林が好きで森を楽しむに來る人々、つまり森林から何かを受けとる受身の人々が、おたがいの協力や学びのなかから森林生態系を理解し、その保護に取り組む、その学びや行動を楽しむ人々へと変化すること。このことが、私たちの森林への解答でしょう。

3. 共に生きる－倫理的平等の概念の拡大を

環境や自然保護の問題にふれるとき「共に生きる」という 自然に調和したやさしい言葉があります。具体性にはとぼしいが深みのある言葉です。

アメリカのロデック・F・ナッシュ博士は「共に生きる」という言葉で表現される自然保護・環境問題の視点を次のように述べています。

「倫理的平等という概念は、最初はさまざまな人間集団へ、次に動物の一部へ、最近では生態系全体へ拡大している。この概念がより明確にされ、現実の問題へ応用されることが望ましい」(1993 自然の権利－環境倫理の文化史 TBSブリタニカ)

私はナッシュ博士の「倫理的平等の概念を、人と人から、人々と生態系へ」という文化史の段階的拡大を、野幌森林公園の空間に応用し、森林生態系保護の視点とすることを提案したいのです。

具体的には、次のような取り組みになると思います。

a) 人にやさしい施設と組織を（人と人がやさしくなければ自然保護は成立しない。）

- ・車イスで利用できるトイレの設置
- ・身体の不自由な方をサポートするボランティア活動の組織化
- ・各種団体（野鳥の会、野草の会、自然保護団体、各種ボランティア団体）の連携
- ・森を訪れた人や各種団体が活用できる森林センターの設置

b) 人々の学びと協力を支えられた森林生態系の保護活動（人々の学習と活動がなければ自然保護は成立しない）

- ・森林観察資料等の充実（ガイドマップ、野草や野鳥の情報）
- ・森林観察のためのボランティア・ガイドの充実
- ・各種観察会の案内と実施
- ・各種学習会・シンポジウム等の実施
- ・自然保護活動（野鳥、野草の保護、森林清掃ボランティア……）

人々が相互にはたらきかけ、共に学びながら、森林生態系への倫理的平等観を育て楽しみながら森林を歩き、保護活動に参加する。これが「共に生きる～人と人～人々と森林生態系」の具体的イメージです。

4. 大沢口・休養園地区の役割

江別・北広島・札幌の大都市圏に隣接する平地自然林の保護の課題は、各シーズン数万人が森林を訪れることです。そしてこの数多くの人々は、本来、森林が好きな森林生態系に善意で接しようとしている方々です。従って、森林を訪れる多くの方々が、相互に働きかけ、森林を学び保護活動をつくりだしていく施設と組織をつくり連携することができれば「大都市圏に隣接する平地自然林の保護の活動」がより大きな輪に成長します。

野幌森林公園の入口として、もっとも多くの人々が入り出る大沢口・休養園地区に「人々の自然保護の振舞いは、人と人のやさしい関係から生れ、人と人の相互のはたらきかけによる野鳥・野草などの学習を通して熟成していく」ことを願い、次の施設を作り森林生態系の保護活動をつくりだしていく必要があるものと考えています。

施設づくりには、森林生態系への影響を最小限になるよう配慮するのは当然です。

- 1) 身体の不自由な方々が利用できるトイレ等の施設。
- 2) 森林を訪れる人々の窓口、各種団体、グループの交流の場、ボランティア関係の方々の活用の場、そしてなによりも「森を訪れる人々の相互の学習の場」等の機能をもつ森林センターとしての施設。
- 3) 駐車場は、森林に配慮し、森から離す必要があります。

野幌の森からの30年目の問い掛けに、私なりにまとめてみました。身近なところで、具体的に解決していかなければならない問題ですので、具体的に結論をだしました。関係機関や市民団体・グループ等で、議論が深められ、具体的な取り組みがうまれることを期待します。

おわりに

毎日のように早朝の森を訪れ、ゴミを拾いながら樹木を観察している森の先輩に、開設以来、この森の野鳥を観察している方々に多くを学び、体調をくずし大沢コースのベンチで横になっていた高齢の方に、森からの癒を教えられ、また、大沢口でカエルを森にかえしている母と子を思いながらまとめてみました。

野幌の森が道立自然公園に指定された、1960年代 アメリカの公民運動のリーダーひとりが「私には夢がある。……」と、人と人とのやさしい関係を、人と人との倫理的平等を説いた人がいました。それから、30年 私たちも夢を持ちたいものです。その夢は、大都市圏に隣接する平地自然林の生態系を、市民が楽しみながら、学び協力して守っていく活動です。その活動は、必ず周辺にひろがりをもせるとともに森と都市、人々の生活と自然との関連へとひろがる。そのひろがりの輪の中心に野幌の森があるのです。



《恵庭の自然》観察会 雑感

札幌市 田中 利男

恵庭の観察会は平成6年度から地元の小林英世氏のお世話で4回目を数える。

下見、7月6日(日)午前10時より、晴天、暑い、参加者ボラレン13名。

さすが森の中は涼しい、自分たちの研修の場として真剣にそして楽しく目と耳を配る。エゾノカワジシャがやはり珍しい。

佐々木副会長より配布の(参考資料)地図によると公園地域の1/2は都市公園型で諸施設、下草刈りで自然形態の地ではない。特筆すべきはこの小さな(41ha)森に毎分2トンを超えるのではなかろうかと思われる「湧水川」があることである(ユカンボシ川)。本流源泉は2ヶ所で、平坦地より5m程下がった谷地形となっている。小さい軽石層から広範囲にしみだしている、(シコツ流下軽石層・前記参考資料より)しかしあまりに街が近づき過ぎている(舗装道路より10m位)。しおりのコース地図下方の左股の方が森の中にあり水量も多いようだ(散会后確認)。

本番7月13日(日)午前10時より正午まで、晴天、暑い、一般参加者19名、ボラレン14名参加者に別掲のしおりを配る、ボラレンチーフ5名にて5班分けとし2家族2班とする。

他のボラレンは各班に付いて一緒に行動。本日は恵庭市民の運動会である、10時の開会式挨拶の頃は運動会も盛り上がり川端副会長のお声も途切れがち、賑やかなことだった。

森の中はやはり涼しく快適。ユカンボシ川は何と言ってもロマンを感じる、すぐ上の兩岸広場が竪穴式住居跡であり、下の川は命の水であったのでしょう、参加者もきれいにつめたいとしゃがみこむ、飲めないのが残念である。草、コケの下には「ヤマトヨコエビ」(通称・小林氏説明)が沢山いる。(体長1cm以下)

草・木本は大半しおりに記入、花は少ないが実をつけている物が目につく。

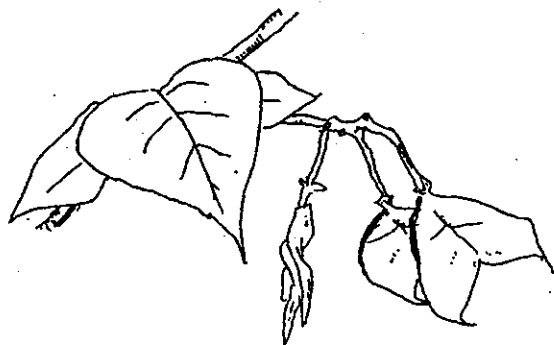
運動会の日に当たり参加者は少なかったがさすが集まった面々自然を見ることの知っている方々でそれぞれ楽しく12時終了が20分も過ぎてしまった。

終会のお顔を拝見すると楽しい笑顔の集まりで良かった事をもの語っていました。

このコースに3ヶ所程「クジャクシダ」があったのだが今回は見つけられなかったどうしたものか?

なお「オーレンシダ」を川端氏が確認され皆様がホーシ群の面白さをルーペで学んだ。

皆様本当にありがとう御座いました。



ミツバウツギの実

「ニセコの自然」観察会 報告

～ 神仙沼湿原めぐり～

ニセコという呼び名は、アイヌ語からきたと言われています。ニセコアンヌプリの南斜面西寄りの所を南流し、昆布温泉を通過してさらに南に下り、尻別川に入る川を地元では「湯の川」と呼び、それが「ニセコアンペツ」と言われる川です。

ニセイ・コ・アン・ペツ「断崖・に（に向かって）・ある・川」それからニセコの名が生れたと言います。

ニセコの地は、多くの山が連なっています。ニセコアンヌプリを主峰に、イワオヌプリ、ニトヌプリ、チセヌプリ、シャクナゲ岳、白樺岳、目国内岳、岩内岳、雷電岳など1000m～1300m級の山々が東西およそ25kmに連なっています。

このニセコ連峰には美しい湖沼群が点在しています。ニセコの山を映す清らかな水面、原生林や高山植物に囲まれた風景。これらの沼の中で最も訪れる人が多いのが神仙沼です。神仙沼は、チセヌプリ（1134m）北側溶岩台地上にある標高777mにある湿原沼です。

恒例になっている「ニセコの自然」観察会が、今年も7月29日（日）神仙沼コースで行われました。集合場所になっている神仙沼休憩所へ通じる道路のあちこちに、タケノコ採りの人々の車が置かれています。道端で採ったタケノコの皮をむいている人もいます。自然の恵みを節度ある心で楽しみ、そして自然を汚さぬ心構えを多くの人々に持ってもらいたいと考えながらこの光景を見ていました。

私たちと、ニセコ自然愛好会とが協力しあって行ったこの観察会は、昨年雨天とはちがい、曇空ながら格好の日よりでした。片道1kmの行程を三つの区域に分けての観察です。アカハラの「キョロン、キョロン……」という明るい鳴き声に送られての出発です。

（1）ダケカンバやエゾマツ等の林

神仙沼へのコースはスタート地点から木道が敷かれ、歩きやすい道です。ダケカンバ、アカエゾマツ、ミズナラ、シナノキを目で追いながら木道を歩きます。ハウチワ

カエデは秋になると、きっとみごとな紅葉を見せてくれることでしょう。紅葉の頃このコースを歩くことをおすすめします。ミネカエデの若葉が手のとどく所にあります。この葉の正端なシンメトリーがなんともみごとで、好きな葉の一つです。

木道の両脇にチシマザサ、クマイザサを比較できる場所があります。さらに、ハイイヌツゲ、アカミノイヌツゲを見比べながら歩を進めます。シダ類のシシガシラ、ヤマワラビ、ヤマソテツ、シラネワラビ、ヤマドリゼンマイも見つけられます。

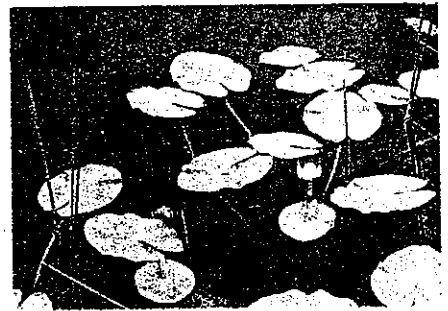
(2) 林をぬけた低木の多い道筋

前日の下見でガイドしていただいた、地元の池田さんから、クロウソゴ、オオバスノキ、アクシバ等のツツジ科の区別を覚えてもらった事を思いだしながら歩きます。

葉の先が急にとがっているツノハシバミ（ヘーゼルナッツの一種）も見ることができます。ハナヒリノキもあちこちに見ることができます。この葉の粉が鼻に入ると、くしゃみがでるところから、この名がつけられたと言いますし、かつては、この葉を粉にしてトイレの殺虫剤にしたとも言われています。木道の左右にこのような低木が数多く観察でき楽しく歩を進めていきました。

(3) 湿原と沼

やはりなんと言ってもこのコースのハイライトは、神仙沼と周辺の湿原です。アカエゾマツに囲まれた湿原は、花の多いところです。小さな沼の周りには、チングルマ、食虫植物のモウセンゴケが随所に見られます。また、トマリスゲ、ワタス



沼の中のネムロコウホネ

ゲ、ミカズキスゲ、ヤチスゲ、ホロムイスゲを見比べることもできます。沼の中には、ネムロコウホネ、クロヌマハリイ、フトヒルムシロを見ることができますが、やはり、ミツガシワの可憐な白い花が印象的です。

沼を一巡して、いま来た木道に戻ります。沼めぐりに訪れたたくさんの人と交差します。12時を過ぎた時刻、スタート場所に戻りました。

前日、宿泊したペンション「ふきのとう」のオーナーであり、本会の会員でもある池田さんの差し入れ弁当をいただき、楽しいニセコの日を思い出にして、帰路についたのでした。

(文 広報部 田村)



千葉とき子・斎藤靖二 著

かわらの小石の鑑

東海大学出版会 1997. 2. 20発行

定 価 2 5 7 5 円

川は毎日の暮らしになくてはならぬ存在です。川はその時々によってさまざまな表情をみせてくれます。自然が豊かな川、心がやすらぐ川、時には恐ろしい川になったりします。近年、川に対する関心が高まり、水質のこと、河畔林のこと、川に住む魚のこと、上流の森林のこと等々が話題にあがっています。しかし、川原の石ころは、砂利採取問題を除いて話題の対象にはなっていないようです。

川は、源流部・上流部・中流分・下流分と、いずれの場所に足を運んでみても形の違いはありますが、石や砂が堆積しています。川は上流域の地質を浸蝕してできた石や砂を洪水の時などに掃き集め、下流へと運んでいきます。ですから、石や砂は上流の山地の地質を代表している岩石標本とも言えますし、川原は日本列島の地質を表す岩石博物館といってもよいでしょう。

川原の石は大きく三つに分類できます。

- 堆積岩………地表にでている岩石が、雨や風などで風化し、くだかれた石（礫）や砂や泥がたまって層をつくり、常温常圧のもとでできた岩石です。
- 火成岩………マグマが固まってできた石を火成岩といいます。マグマが地上で固まると火山岩となり、地下で固まると深成岩になります。
- 変成岩………地中の高温・高圧により成分や組織が変化することを変成作用といいます。堆積岩や火成岩が変成作用によってできた岩石を変成岩といいます。

本書は、関東地方の荒川・多摩川・相模川の典型的な石を例に示しながら、また、一方では堆積岩、火成岩、変成岩に分けて特徴の解説しています。各々の石の写真と共に偏光顕微鏡写真も掲げていますので、特徴が理解しやすくなっています。見落としがちな川原の石に親しむきっかけになると思います。

植物用語の解説集(3)

川端 功 治 編

48) ゴルジタイ (Golgi 体)

細胞が合成した物質の一時的な貯蔵、分泌、排出、などの働きをする細胞器官。

平板で孔のあいた袋状のものが数個重なったような構造である。

植物の細胞壁はゴルジ体からの分泌物でできている。

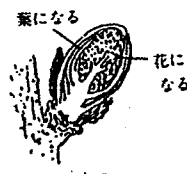
49) コロニー (Colony)

一種か数種の生物からなり、ある地域を、ある期間占めている群体。

50) 混芽 (こんが)

スイカズラ科のニワトコの冬芽は鱗片が裂けると、中から花と葉が出てくる。このように花と葉が混じっている芽をこ混芽という。

例 ナシ、リンゴ (バラ科) など。



51) 根粒 (こんりゅう)

根の一部分がこぶ状にふくれたもので、その中に含まれているバクテリアの働きで窒素固定が営まれる。マメ科植物にみられ、かつては根瘤と書かれた。

ハンノキ、ドクウツギ、の放射菌による根粒も同じ働きをする。

(さ行)

52) 三倍体 (さんばいたい)

一つの細胞に三組のゲノム (前掲) をもつ個体。二倍体の非減数配偶子と正常な配偶子が受精した場合や、二倍体と四倍体の正常な配偶子が受精した場合にできる。

しばしば減数分裂が異常になり、子孫をつくることが出来ない。

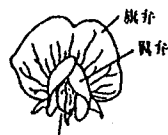
種なしスイカは、この性質を利用して人工的に三倍体をつくり、種子の発育不全を起こさせたものである。

53) 蛇紋岩植物 (じやもんがんしょくぶつ)

蛇紋岩、橄欖 (カンラン) 岩などの超塩基性岩が露出した岸壁や、崩壊地に特有の植物。超塩基性岩の露出した場所は酸性で、クロム、ニッケルなどの重金属を含むので、特殊な植物が生育している。カトウハコベ、ナンブイヌナズナのように超塩基性岩地だけに生き残っている種類と、アポイアズマギク、ホソバヒナウスユキソウのように、葉の裏や茎が赤みを帯びたり葉が細くなるなどの超塩基岩地に特有の変形をおこした種類がある。

54) 船弁 (しゅうべん)

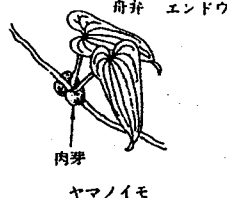
マメ科の花のチヨウ形花冠のうち、中央でもっとも中側にある二枚の花弁 (旗弁と翼弁に囲まれている)。舟の形に見立てて船弁というが、竜骨弁ともいう。例エンドウ、ゲンゲ。



55) 珠芽 (しゅが)

肉芽ともいい、俗に「むかご」ともいう。地上部にできた芽の葉が発達せず茎が養分を貯蔵して球状にふくれ、基部から離れて地上に落ちると発芽して、栄養繁殖の役割を果たすもの。

例ユリ科のオニユリ、ガガイモ科のガガイモ。



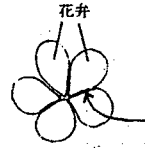
56) 収斂(しゅうれん)

系統の離れた生物が、次第に似通った性質をもつように進化する現象。普通は同じ環境条件や生活方法に適応して変化した場合に起きる。たとえば乾燥地に生える植物の多肉化など。

57) 鑷合状(じょうごうじょう)

毛ぬきあわせ状ともいう。花卉やがくのへりがずれて重なりあわないように、へりだけが毛ぬきの先のように接して並んでいる状態。敷石状、辺合状などともいう。つばみの時期に横に切断すると見やすい。

例キキョウ(花卉の裂片)、ザクロ(がくの裂片)。



58) 鞣皮(じんび)

工業的には形成層よりも外側から採取される繊維部分を差し、アサ、アマ、コウゾ、ミツマタ、などからとれる鞣皮は、布や紙などの原料となる。

解剖学的には二次篩部を指すことが多い。

59) ストロン(Stolon)

地表または浅い地下を水平に細長く伸びる茎で、栄養繁殖の役割を果たすもの。地上部のもととなる芽をもつ。また不定根をだして、母体側のストロンが切れれば新個体を生じる。

オランダイチゴ、ユキノシタ、などにみられる。

匍匐枝、走枝、ランナー、などともいう。



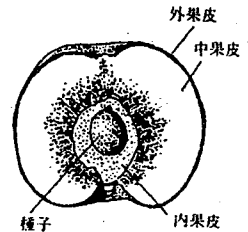
60) 精核(せいかく)

雄性配偶子の核。被子植物では、一つの花粉がつくる二つの精核は花粉管を通して移動し、ひとつは胚嚢の卵細胞の核と受精して胚をつくり、もう一つは極核と受精して胚乳をつくる。

61) 石果(せきか)

液質の中果皮のに木質化した堅い内果皮があつて核となり、その中に種子を含んでいるような果実。

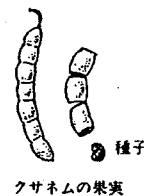
ウメ、センダン、モチノキなど。核果ともいう。



62) 節豆果(せつとうか)

マメ科のクサネム、ヌスビトハギなどの果実は熟すと、くびれたところからちぎれて落ちる。これは一枚の心皮でできた子房が成長し、のちに種子を一個ずつ入れた数室が、くびれめで離れたからである。

このような果実を節豆果という。



(センニンソウ)(タンポポ)

63) 瘦果(そうか)

キンポウゲ科のウマノアシガタやキク科タンポポの果実はみたところ種子のようであるが、果皮がごくうすい膜質で種子とくっついているからである。

このような果実を瘦果という。



64) 相同(そうどう)

ある形質が共通の祖先のもつていた形質から変化してきたものであつた場合、それらの器官は相同であるという。たとえばサイカチのとげは茎と相同であり、サボテンのとげは葉と相同である。

(た、は行)

65) タイガ (taiga)

シベリア地方に発達する針葉樹林。冬の平均気温はマイナス30ーマイナス40度Cで、地下には永久凍土層があり、構成種は少ない。広い意味ではユーラシア大陸とアメリカ大陸の北方にある針葉樹林帯をいう。

66) タンニン (tannin)

たくさんのフェノール性水酸基をもつ物質の総称で、たいていの植物に含まれる。タンパク質やゼラチンを水に溶ける物質に変える性質があるので、皮をなめすのに使われる。

67) 大葉 (だいよう)

同じように葉とよばれていて、維管束植物の葉には、系統的な由来の異なる2型があり、茎の表面の隆起によって形成された小葉に対して、大葉はシュートが変形してできたものである。

茎との分岐点は葉隙 (ようげきー後述のや行参照) をつくり、複数の脈がある。種子植物のすべて、シダ植物の大部分にみられる。大葉と小葉は葉の由来の違いによって区別されているのであつて、長さ数ミリの大葉もあれば50mmを超える小葉もあり、葉の大小を表す用語ではない。

68) 単葉 (たんよう)

一枚の葉のように見えて真に一枚の葉であるもの。これに対して、複数の葉の集まりのように見えるが、正しくは一枚の葉であるものを複葉という。

69) 中肋 (ちゅうろく)

中央脈のこと。

70) 貯蔵根 (ちよざうこん)

ウリ科のカラスウリの根。例サツマイモ、ダリヤ、ニンジン、ゴボウ、ダイコンなど。

71) 點頭 (てんとう)

キキョウ科のホタルブクロ、やキク科のヒメガンクビソウなどの花や果実のように、葉腋に下向きか斜め下を向いて、うなだれてついている状態。

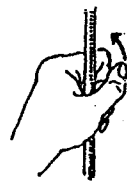
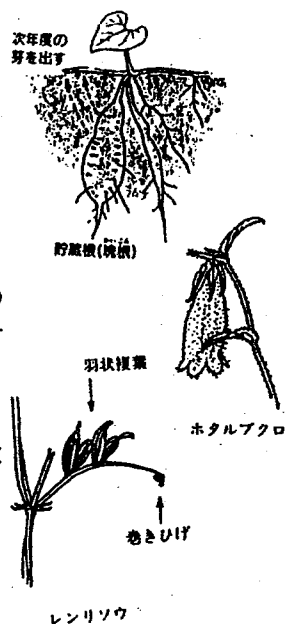
72) 葉巻きひげ (はまきひげ)

マメ科のカラスノエンドウ、レンリソウの複葉のように、先端にひげ状のものがあつて、他のものからみやすい形をしている。このひげは複葉の中の小葉が変形したもので、葉巻きひげというぶどう科のヤブガラシにある巻きひげは枝が変形したもので、ついている位置をみればわかる。

73) 左巻き (ひだりまき)

つるになる茎が支柱に巻きつくとき、茎の先端が時計のまわる方向と反対方向に巻いている巻き方。つるの巻いている支柱を左手で握り、親指の方向に巻いていれば左巻きである。

ヒルガオ科のアサガオが左巻きである。この説に正反対の学説があり全国統一がのぞまれる。



74) 腐生(ふせい)

糞や死体、枯れ葉など生物以外の有機物に寄生すること。死体寄生ともいう。オニノヤガラ、ギンリヨウソウ、ヒナノシヤクジヨウ、などの高等植物は腐生植物とよばれるが、正確には、有機物を分解する菌類から養分を得ているのであって、高等植物みづから腐生しているわけではない。

75) 仏炎苞(ぶつえんほう)

ただ一枚で花序を包む大型の苞。花序を仏像に見立てた場合、その背後にある火炎形の光背(仏身から発する光明をかたどった仏像の背後にある飾り)のようにみえるところから名づけられた。例サトイモ科のミズバショウやザゼンソウ。

76) フラボノイド(flavonoid)

フラボンに似た炭素骨格をもつ植物色素の総称。カロチノイドやクロロフィルに隠れていて、フラボノイドの色はみえないが、高等植物のほとんどすべての組織に含まれている。

77) プランクトン(plankton)

浮遊生物ともいい、水中に漂って生活する生物の総称で、微細な細菌や藻類ばかりでなく、数十センチにもなるクラゲなどもふくまれる。

78) 弁化(べんか)

花卉以外のものが花卉に似た色や形になること。八重咲きの花では雄しべが弁化していることが、きわめて多いほか、がく片や普通葉が弁化した奇形もある。

79) 虫こぶ(むしこぶ)

アブラムシ、ハチ、線虫、などが産卵、寄生したために、植物体の一部が異常な発育をしたもの。虫えい、ゴールともいう。

80) 無融合生殖(むゆうごうせいしよく)

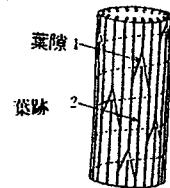
配偶体上で卵と精子の接合が見られないまま、胞子体が形成される現象。種子植物では無融合種子形成、シダ植物などでは無融合胞子形成といい、無配生殖(アポガミー)ともいう。胞子体と配体の染色体数が同じで、三倍体でも子孫をつくり雑種起源の型が新種形成をするのに関与するなど、種分化にかかわることが多い。

81) 游走子(ゆうそうし)

鞭毛(べんもう)をもって水中を運動する胞子のこと。

82) 葉隙(ようげき)

茎の維管束から葉に向けて分出する維管束を葉跡というが、管状中心柱から葉跡が分出する際に管状中心柱の表面に孔(あな)があくことがある。この孔を葉隙という。



アマの茎の維管束の走りかた
1 葉隙 2 葉跡
点線は便宜的に葉の付着点を
順に結んで線(基礎らせん)

83) 葉針(ようしん)

葉またはその一部分が硬くて先のするどいトゲになったもの。サボテンのトゲがその代表的な例だが硬い毛も微小なトゲとなっており、トゲのすべてが葉針であるとはいえない。



カラタチの茎

ハリエンジュやおおくのアカシアでは托葉が葉針になっている。

サンショウのトゲこれと類似の位置にあるため誤って葉針とされることがあるが、正しくは毛状体という。

カラタチなどのミカン類のトケ葉腋にあるためしばしば茎針とされるが、腋芽の第一葉がトゲになったもので、葉針の一種である。ムレスズメ(マメ科園芸品)では葉軸の先端が鋭くとがり、秋に小葉が落ちた後でも茎に茎針が残っているのが見られる。

84) 葉枕(ようちん)

葉の基部や小葉の基部にあるふくらみで、内部の細胞の膨圧が変化することによって就眠運動に関与するもの。オジギソウ、ネムノキなどには、とくに顕著なものが見られる。

85) 鱗芽(りんが)

地上部にできる特殊な芽で茎はほとんど伸びず、養分を貯蔵した多肉の葉が重なり合っている。芽の付け根から離れ、地上に落ちて発芽し、栄養繁殖の役割を果たす。例オニユリなどに見られる。バラ科のサクラの冬芽のように鱗片でカバーされたものも鱗芽である。



オニユリ

出典

生物学辞典 岩波書店(第4版)
植物用語集 石戸 忠 研成社
大辞泉 松村 明 小学館
植物の世界 朝日百科 週間朝日

以上

会報40号から3回にわたって掲載しました、川端功治氏がまとめられた「植物用語の解説集」は今回で完結しました。大変なご苦勞で編纂されたものですのでおおいに活用していきたいものです。

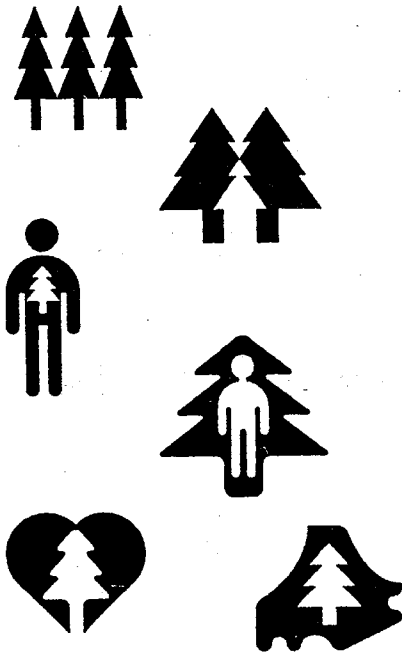
シンボルマークを募集します

今次の定期総会で「シンボルマークの制定を…」という意見がありました。その後の役員会でも審議され、会員の皆さんから公募した方が良いのではという事になりました。制定されれば、名刺、封筒、備品、旗や看板に統一された形で利用されます。

要領は次のとおりです。どしどし応募下さい。

1. 内容 シンボルマークから当協議会を明快に連想するもの
2. 応募件数 一人何件でも自由
3. 応募期限 平成10年1月末
4. 応募先 佐々木事務局長あて
5. 決定方法 役員会で審議のうえ決定
6. 発表 広報誌「えぞまつ」の誌上

例えば次のようなものもあろうかと思えます



北海道
ボランティア・レンジャー
協議会

北海道
ボランティア・レンジャー
協議会

観察会研修会 情報

平成9年度に主催（共催）する自然観察会

§ 「宮城の沢の自然」

平成 9年10月26日（日） 10:00-12:00 現報 9年10月12日（日）

集合場所 札幌市西区平和の滝入口バス停か平和公園最奥駐車場

§ 「野幌の自然」 野幌森林公園

平成 9年11月16日（日） 10:00-12:00 現報 9年11月 9日（日）

集合場所 野幌森林公園内北海道開拓記念館前

平成9年度北海道野幌森林公園事務所主催で

協議会が協力する自然観察会

（野幌森林公園で実施）

§ 秋の森の観察会 平成 9年10月19日（日） 9:30-14:00 現報 10月12日（日）

集合場所 野幌森林公園大沢口

§ 12月の森の観察会

平成 9年12月 4日（木） 10:00-12:00 現報 11月27日（木）

集合場所 北海道開拓記念館前

§ 1月の森の観察会 平成10年 1月 8日（木） 10:00-12:00 現報 1月 6日（火）

集合場所 北海道開拓記念館前

1月以降の情報については、会報43号（1月上旬発行）に掲載します。

自然観察会『宮城の沢の自然』のお知らせ

平和霊園最奥駐車場から宮城沢川の瀬音を右に左に聞きながら、林道を散策してみましよう。早春から晩秋まで自然観察の人より山菜採りの人々に頻りに行き合う、まだ、あまり知られていないフィールドです。早春のエゾエンゴサクから始まりシラネアオイ、サンカヨウ、シウリザクラ、夏のジャコウソウ、エゾアジサイ、クガイソウ、秋のダイモンジソウ、エゾトリカブト等多種の花々を観察することができます。今回は紅葉を見て頂きますが、野の花・樹・蝶・野鳥と色々楽しめる所です、「精竜の滝」もちょっと寄り道をして見てみましょう。

主催：北海道ボランティア・レンジャー協議会

日時：平成9年10月26日（日）午前10時から12時まで

集合場所：札幌市西区「平和の滝入口」バス停もしくは平和霊園最奥駐車場

観察コース：霊園最奥駐車場を10：00にスタート。林道を歩きながら観察し同じ道を戻りスタート地点で12：00に解散するコースです。

案内者：北海道ボランティア・レンジャー協議会会員（自然解説員）

その他・・・この観察会はどなたでも自由に参加でき、参加費・事前の申込は不要です。当日、集合場所で受付をします。↑小雨決行です。暖かい服装で雨具をご用意ください。

交通機関：車の方は霊園最奥駐車場に10:00までに集合して下さい。公共機関利用の方は地下鉄琴似駅より市バス①乗り場9:05発[西42]「平和の滝入口行き」乗車。終点下車。ここより自然観察員の案内で駐車場まで移動します。

お問い合わせ先：北海道ボランティア・レンジャー協議会事務局

佐々木 幸夫 ☎875~6602

[お知らせ]

自然観察会 「野幌の自然」

11月も半ばになりますと、落葉広葉樹はしっかり冬の身支度をし、森の中は一段と明るさが増してきます。

林床植物も静かに、雪の茵を被り春の訪れを待ちます。そんな森を散策してみませんか。

いろいろな樹々の姿と冬芽、野鳥、エゾリスや昆虫など、この時期の森の生活を自然観察会をとおして、かいま見ませんか。ボランティア・レンジャー（自然解説員）がご案内します。

主催：北海道ボランティア・レンジャー協議会

協力：北海道野幌森林公園事務所

日時：平成9年11月16日（日）午前10時から12時まで

集合場所：北海道自然公園野幌森林公園内北海道開拓記念館ロビー

観察コース：北海道開拓記念館周辺の広場や森

案内者：北海道ボランティア・レンジャー協議会会員（自然解説員）

その他：

※ この自然観察会は、どなたでも自由に参加でき、参加費・事前の申し込みなど不要、当日集合場所で受付します。

※ 暖かい服装で、雨具をご用意ください（小雨決行です）。

（交通機関）

☆ JR函館本線森林公園駅下車

☆ 地下鉄新さっぽろ駅からJRバスを利用（北レーンバス乗場）

開拓の村行き（10番乗場）に乗車し、記念館入口で下車

新さっぽろ発午前8時35分→記念館入口8時46分

9時17分→ 9時28分

☆ 江別方面行きのバスに乗車、国道12号「開拓の村入口」で下車

（お問い合わせ先）

北海道ボランティア・レンジャー協議会事務局 ☎ 875-6602

北海道野幌森林公園事務所公園利用課 ☎ 898-0455(内線44)

■■■■■■■■■■ 編 集 後 記 ■■■■■■■■■■

◆紅葉が一気に山を駆け下り、平地の樹木の葉も色とりどりです。毎朝見ている山々の頂きが白く輝きはじめました。降雪前の森を訪れ、小鳥たちの鳴き声と姿をもとめる、そんな季節になりました。

◆今年度の育成研修会を修了された受講生のうち、21名の皆さんの入会がありました。ポラレン会員としての活躍と、会報誌「エゾマツ」を通じて、さまざまな情報発信をしていただけることを期待します。

◆本会の観察会のメインフィールドとしている 野幌森林公園の整備をめぐって論議が起きています。自然観・価値観の違いによって、この考え方はさまざまでしょう。

必要なことは、これらの論議を通して共通理解事項みつけだしていく努力が求められることは言うまでもないことでしょう。掲載された、大槻 日出男氏の主張の中から私たちの間で論議が深まることを願いたいものです。

北海道ボランティア・レンジャー協議会

会報誌「エゾマツ」42号 1997.10.20 発行

発行責任者 大友 健

(表紙絵 広瀬 三崎 篤)